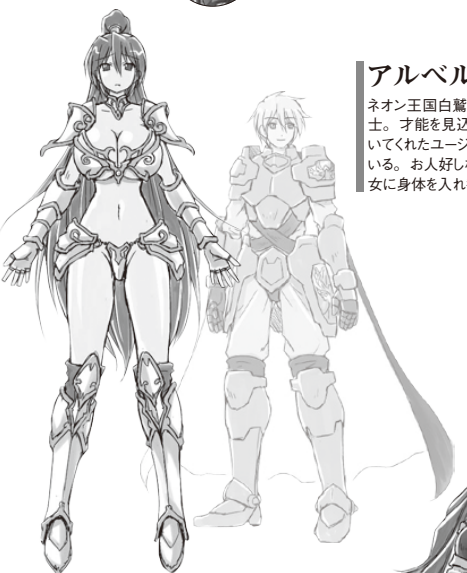
換身の騎士
アルベルト
淫靡な魔女と入れ替わった肉体
小説 狩野景 挿絵 緑木邑
立ち読み版

第一章　魔女討伐　006
第二章　恥辱の女身　051
第三章　舞踏会の罠　110
第四章　肉体奪回　165
第五章　換身の騎士　216
エピローグ　270

登場人物紹介

Characters

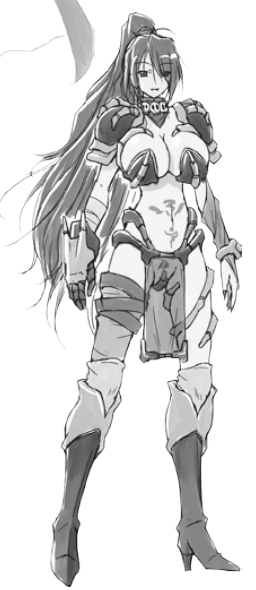


アルベルト・メリン

ネオン王国白鷲騎士団に所属する騎士。才能を見込んで白鷲騎士団に招いてくれたユージーンを敬愛し信頼している。お人好しな性格を利用され、魔女に身体を入れ替えられてしまう。

ナスタロヴィカ

他人の肉体と入れ換わることで生き続けてきた魔女で、好奇心や道楽のためだけに人体改造や集落の破壊を繰り返す。妖艶な美女の肉体と引き替えに、アルベルトの身体を奪い取った。



ユージーン・ファウスト・ディオ

ネオン王国白鷲騎士団団長。天才的な剣技とカリスマ的魅力により、下級貴族の子弟や傭兵上がりの荒くれ者ばかりの団員を取りまとめる。

エリク・メリン

高潔な兄を尊敬するアルベルトの弟。真っ直ぐな性格だが、粗暴で激しい気性を抑えられない。

男の身体とは構造からして全く違う、すべやかでしっとりとした触り心地に絶句する。
男女の睦(むつ)みごとはきちんと婚姻を結んでから行うべきだと思い、いくら仲間たちに誘われても金銭で女を抱くことは頑なに拒んできた。
しかしこのように初めて女体と密着して、彼らの気持ちが分かったような気がする。
(軽いな……、それにこんなに体つきも華奢で。これでよくあれだけの剣を振るえたものだ。それにしても、なんだ、この甘い香りは？　香料をつけているのか……？　いや、その匂いではなく、もっと生々しい……肉体的な香気というか……)
柔らかな肌は剣を交わした果てにしっとりと汗ばんで、温かな体温を伝えてくる。
手荒に力を込めれば簡単に壊れてしまいそうな肢体から漂い来る魅惑の香りに我を忘れていると、鼻にかかった囁き声が耳朶を擽った。
「あたしの身体を味わいたい？　そんな顔してる。いいわよ。勝負に負けたのだからあたしはあなたのモノ。思うままに好きにして……」
縛められた手を押し当てて乳房の肉感を強調し、ナスタロヴィカは身をくねらせた。
男とは根本からして異なる、曲線的な蠱惑の仕草に抗いようもなく心を惹かれる。
「――!!　き、貴様、いつの間に!?」
魔女に苦痛を与えていた枷の締め付けが和らいでいた。輪をつなぐ鎖も最低限の身動きが取れる長さへ戻っている。その指でナスタロヴィカは騎士の胸板を撫で回してきた。
「わ、私に触るなッ！」

鎧の上からでも心地よいくすぐったさが伝わってくる。
敵の好きにさせるわけにはいかないと思いながらも、振り払う気力が湧き上がらない。
次々に脳裏へと浮かび上がってくる雑念に気を散らせている間に、思いがけないほどの時間が過ぎていた。我に返れば、魔女を抱え上げてからその場を一歩も動いていない。
「お、おい。馴れ馴れしく、するなっ。こ、この」
魔女が頬を擦り寄せてくる。
絹のような艶髪がさらさらと触れて溢れ来る溜め息を押し止めるのが難しい。
触れ合う肌は綿のように柔らかく温かで、このままいつまでもこうしていたい誘惑に駆られる。こんなに間近に異性の、それも絶世の美貌に迫られたことなどない。
（はしたない……。女性の方から、このような……。でも、ああ……）
吐息をフッと首筋に吹きかけられると、背筋にゾクっと甘い震えが走った。
（しかし、なんという、良い香りだ。女の肌というのは、こんなにも甘い匂いが……）
動揺が純真無垢な騎士の胸を高鳴らせる。
部下たちが決死の思いで魔物を食い止めてくれているというのに。
一刻も早く駆けつけて、ナスタロヴィカを召し捕ったことを皆に知らせ、この魔女が召喚した使い魔を一掃しなければならないのに。
「くっ‼　やめ、ないかっ、魔女めっ！」
これ以上時間を無駄にはできない。部下たちの姿を脳裏に浮かべ誘惑を振り切ると、ア

ルベルトは腕に抱き上げた魅惑の美身を放り投げようとした。
魔封じの拘束具が縛めを緩め、もう自力で歩けるはずだ。この先は今度怪しい振る舞いをしたら即刻斬り伏せられるように剣を突きつけ連行するだけ。
だが魔女は手を放すよりも早く、両腕をアルベルトの首に絡みつかせてきた。
密着が更に深まり、彼女の熱い体温が心地よく侵食してくる。女体が漂わせる蜜のような体臭が濃さを増して鼻腔を満たした。
（――しまったっ！）
なんという失態続き。油断するにもほどがある。
手錠の鎖を武器に首を絞められる前に、と腰の剣に手を伸ばす。だがナスタロヴィカが実直な騎士に仕掛けてきたのは、攻撃ではなく熱烈な口づけだった。
「――んむうっ⁉　にゃにを？　ひゃめ……ろッ」
首筋に回されたしなやかな腕は彼を傷つけるどころか、優しい愛撫で髪を撫でながら乳房がやたらと際立って熟したしなやかな身体を強く密着させて抱きついてきた。
艶めかしい湿り気を帯びた肉厚の唇が甘く熱く彼の唇に粘り着いて、引きはがせない。
くちゅ、と唾液の音色が淫靡に響く。吐息が混ざり合って甘さを増す心地よさに脳裏がぼんやりと霞に覆われて、身体に力が入らなくなった。
にゅるん、と軟体動物のように蠢く女の舌が口腔に潜り込んでくる。味蕾を弄ぶように舐め撫でながら、アルベルトの舌に絡みつく。

「へぁああっ!!」
脳天が浮き立つその快感に身体中の力が抜け落ちて、生真面目な騎士はがくんと膝から崩れ落ちた。
（魔導の……術……？　いや、しかし……）
魔封じの枷がある限り、魔術を使おうとすれば苦痛と不自由が魔女を襲うはずだ。
「あは、あなたが来る前からこの部屋に快楽の香木を焚きしめていたの。常用すると色狂いになってしまって危険だからってどこの国でも使用が禁止されてる強烈なものなんだけど、純情な騎士さんには刺激が強すぎちゃったかしら～？」
「な……、ん、だと……!?」
この広間に踏み込んだときに嗅いだ甘ったるい匂いの正体はそれだったのかと思う。あまりに安っぽい香りで特に警戒することもなかった。
「そういうあたしも、もう身体が疼いて疼いて……気が変になりそうだもの～」
全身が弛緩して起き上がれず仰向けとなったアルベルトの上に、ナスタロヴィカは身体を覆い被せて密着していた。くねくねと身をくねらせる彼女の際どい鎧からいまにも零れ出そうな乳房が、彼の胸板の上で艶めかしく拉げる。
「やめ……ろっ！　私の上から、どけっ!!」
いままで味わったことのない極上の柔らかさが、鎧の上からでも分かった。
強敵を前にしたとき以上の勢いで心臓が鼓動し、息苦しさを覚える。押し退けようとし

た手が、彼女のなにも纏わぬ細腰を直に触り、驚いて手放した。
顔が焼けるように熱く充血している。
「どけだなんて……。もうこんなになっているのに、できるわけないわぁ～」
魔女が上体を起こし、ホッと息を吐いたのもつかの間、膝立ちでアルベルトの上に跨がったまま腰鎧の股当て部分を指先で横に捲り上げた。
「――あうっ!?」
そこには淡い紅に色づいた肉の花弁が淫蕩に綻び開いて、内側から溢れ出た蜜にねっとり濡れそぼっていた。
（あ、あれが、女の……部分……!?）
禁欲を常としていた騎士にとって初めて目にする異性の神秘箇所を、瞬きも忘れて凝視する。男の部分とはなにもかも違う潤んだ溝がぬめるそこは、否応なしに異常な興奮をもたらす。
股鎧の布地部分と糸を引いて粘り着く蜜液が、見詰めている間にも絶え間なく湧きだして引き締まった内腿へと滴り落ちてくる。漂い来る甘く爛れた発酵臭に鼻腔を擽られると、催淫の香木以上の痺れが脳裏を蕩けさせた。
いま彼女が彼から剣を奪い斬りかかってきたら防ぐこともできないだろう。
そんな危機に焦りを抱くこともできずただ惚けた眼差しを一点に見据える。
ナスタロヴィカは緩めた股鎧から女陰をさらけ出したままで、鎖につながれた両手を彼

の股間に伸ばしてきた。
「あなたのここも、あたしと一緒。もう欲しくて欲しくてたまらなくなっちゃってる」
自由を制限された手で器用に腰当てを外す。
「やめ……ろ、な、なに……を？」
微かに残った理性で抵抗を試みるが、少し前屈みになった魔女の胸で釣り鐘形に揺れる巨乳房と陰唇花弁をひくつかせる股間の間を、視線が行ったり来たりしてしまう。
拒む行動も起こせぬままにズボンの前が開かれ、下穿きの中から尋常ではない疼きに苛まれる肉竿が引っ張り出された。
「ひうっ！」
ぶるんと打ち震えて弾け立つ感触に思わず喘ぎを迸らせた。
「はわぁあ、素敵だわ！　おっきくて、逞しい!!」
その吐息に魔女の感嘆の声が重なった。
節くれ立った幹を十分に太らせた黒光りする男根は、もうすっかりと充血しきって急角度に反り返り、カリの張り出した鋭角的な亀頭を誇示している。
「こんな立派なものがあるのに、使わなかっただなんてなんてもったいない。でもこれの初めてをあたしがいただけるのね？　ふああ、想像しただけで腰が抜けちゃいそう!!」
大量のカウパーを滲ませて幹全体をてらてらさせる剛直に、肉感的な尻を振って魔女が興奮する。

「ぐうっ！　よせ、やめ……ろっ!!」
脈打ち続ける陰茎とは裏腹にアルベルトが呻くが、その屈辱の表情にナスタロヴィカはますます喜悦に身を打ち震わせる。
「しゃぶったり、お乳で弄んだり、色々愉しみたいけどぉ、もう、あそこ、限界ぃ……」
彼女の言葉が具体的になにを意味するのか、奥手な騎士には想像もつかない。
けれどももの凄く淫らなことなのは確かだ。平時ならば生真面目な心が嫌悪を抱くのだが、いまは期待するかのように胸がわくわくとときめく。
「挿入(いれ)ないと、もう……頭おかしくなっちゃいそう。ふぁあああぁ……ッ!!」
騎士を跨いだまま膝立ちから、魔女が排便するようなはしたない姿勢へと移った。
彼女の足首にはめられた枷同士をつなぐ短い鎖が、アルベルトの腰を押さえつけますます身動きを封じる。
「なに……をっ!?」
性交の知識が乏しく、騎乗位という体位があることを知らない。
（どうする……つもりだ!?　怪しげな魔術を？　いや、しかし……。あのような顔をして、いったい……!?）
戸惑う騎士の怒張へと、魔女ナスタロヴィカは興奮の焦りに太股を痙攣させながら、股間を真っ直ぐ下降させた。
（えっ？　魔女の股ぐらがッ、わ、私のモノにっ!!　まさかっ）

女の方からこのような行いを仕掛けてくることに驚いてしまう。
しかも彼女は敵であるというのに。
「ほぁあぁっ！」
「んおっ!!」
同時に迸る二人の上擦った声に重なって、ぬぶん、と亀頭の先端が灼熱の泥濘（でいねい）に埋まり込んだ。
（な……に……？　ああっ!!）
性器の先端で溶け崩れた甘美の感触に、なにが起こったのかと顔を持ち上げる。
手錠をかけられた両手で自らの乳房を揉み拉げ、破廉恥な魔女が淫らな表情を浮かべる。
蹲踞（そんきょ）の姿勢で降ろしてくるその股間の割れ目へと、そそり勃った自分の男根がずっぽりめり込んでゆく様を、アルベルトの生真面目な瞳が目撃した。
（入って……る？　私の、が、魔女の、股に!?）
性の知識は乏しいが、なにをするかくらいは騎士団の同僚との雑談で知っている。
けれども実際に自分で体験してみて、極太の怒張を咥え込んでしまう女穴の神秘に驚きを隠せない。ヌルヌルの愛液に満たされた膣穴の中は、染みるほどに熱く、蠢く肉襞が熱烈に絡みついて狂おしい擦れ感を与えてくる。
（く……これほど、気持ちいい、とは……!!）
初めて女の肌をしっかりと触れ味わったときと同時に、なぜ仲間たちが安くない金を払

ってまで女を買いに行くのかが分かった。
「く……あふ……」
キュンキュンと小刻みに締め付けてくる快感に溜め息が溢れた。窄まる襞壁を掻き分けて奥へ奥へと埋まってゆく感触は、一種独特の征服感を与えられる。
ぬぶっ、ずぶぶ、にちゅ、ぬぷ、ぬぶずぶん！
溢れる愛液越しに粘膜が擦れる音色も興奮を掻き立てる。深々と根本近くまで埋まったときに、亀頭の先がなにか柔らかく窄まったものに突き当たった。
それでも一気に腰を落とし、ナスタロヴィカが彼の下腹にぺったんと尻をつける。
「んあぁあっ‼　奥っ、突き上げられたぁっ！」
亀頭の押し込みに子宮を迫り上げられ、魔女が切羽詰まった顔で悲鳴を上げて身を仰け反らせる。
一瞬苦しいのかと思ったが、その顔はしどけなく口元を緩めて甘美に浸りきっていた。
「すごいぃ、太いの、膣内いっぱいに満たしてるうっ。はううっ、勝手に腰動いちゃうっ‼」
ぬちゅっ、ずぷっ、ズポずぷっ、ヌププッ！
蹲踞姿勢のままで、女が腰を上下に振り始めた。
襞膣が竿幹にヌルヌルの擦れ感を与えてくる。
「くふぁああっ！　こ、こんな……っ‼」

「あの魔女、股ぐらとケツになにか仕込んでるぞ!!」
民衆が双穴バイブの存在に気づく。
「本当だ。だからさっきからあんなドスケベなツラで身体くねらせてたんだ」
「騎士団に捕らえられても、ぶっといの仕込んでなければ我慢できないってか？　じゃあ、大好きな太いのもっといっぱい味わわせてやらなくちゃな」
憎き魔女を騎士団の手から奪い取ってでもなぶり殺しにしてやりたい。
そんな剣呑さを漂わせていた人々が、淫靡な方向へと雰囲気を変えた。
扇情的な鎧から魅惑の肢体をさらけ出す魔女。
そのあられもないイキ乱れに股間をギンギンに隆起させた男たちが迫りくる。
「やめ……ろ、来る、な……。私に、触れる、な」
これ以上刺激を受けたら、どうなってしまうのか自分でも見当がつかない。
恐れを感じて逃げようとするが官能に支配された身体がいうことを聞かない。
膝立ちの俯せのまま易々と押さえ込まれてしまった。
「うほ、でけえケツしてやがる」
「ここから牝臭え匂いぷんぷんしてくるぜ」
「ううっ、そんなとこ……ッ！」
バイブが一うねりする度に濃さを増す甘酸っぱい液臭は自分でも気がついていた。
ままならない身体に恥辱を覚える騎士を追い詰めるように、男たちは房肉を無造作に掴

みながら割れ目に鼻を寄せクンクンと嗅いでみせる。
「中でぶるんぶるん動いてやがる。こいつこんなもの股とケツに咥え込んで歩いてやがったのか？」
「ケツの中からも、スケベな匂いがぷんぷん溢れてきやがるぜ！　排泄するところなのに、太いのぶち込まれて喜んでるなんてどうしようもねえな‼」
「――‼　そんなことっ。あ、ふぉおあぁ、んぅうっ！」
甘酸っぱく饐えた匂いは自分の鼻にまで漂ってきている。屈辱の嘲りに反論しようにも、指が食い込む痛いほどの刺激にも、ゾクゾクと歓喜の震えが戦慄き立ってなにも言えなくなる。ただでさえ男に尻を撫で回されるなんて情けなくてたまらないのに、指を細かく蠢かせながら揉んでくる感触が狂おしくてたまらない。
「穴ん中に常になにか挿入てないとダメなんだろうよ。これだけ淫乱になると」
揶揄する男たちの吐息が首筋や露出した素肌に吹きかかり、熱さとドブ臭さに嫌悪の震えが走る。
「ちが……ッ。こんな、もの、早く、抜いて……くれ、あああぁっ」
これだけ近づかれるとさすがに、ショーツの下がどうなっているのかが分かるらしい。その様を揶揄され、好きで挿入られているわけではないと言い返したいが、襞壁が絶え間なく竿幹に絡みついていて誤解されても仕方がない状態だ。
「しかしこんなもので自分だけ楽しむより、俺らの逸物を満足させろよ！」

淫乱な魔女を前に怒りを肉欲へと変えた男たちが焦れた。張り型を内側に封じた革ショーツを引き下ろそうとする。と、その途端、魔導の力で固定されたベルトが瞬時に緩んだ。
「おわっ！　外れたぞっ!!」
「ぬ、脱がせろッ！」
町民たちがいきり立つ。
「ふぇっ!?」
驚いてトバイアスを見ると、彼の指が遠隔操作機の側面にあるボタンを押し込んでいた。それがショーツの鍵のスイッチになっていたらしい。
「あ、ああっ、そんな、強くッ、触るな、あッ！」
熟れ房を窮屈に包み込んでいた鞣革（なめしがわ）が緩む。殺到する町民たちの手に引きはがされ、それにつれて、膣と肛門から極太棒が抜き出される。
ぬぷぷ、じぷ、じゅずぶぶぶずぷんっ!!
「ほぉおっ！　んんんぅ〜〜〜っ!!　はうっ！」
竿が蠢いているまま抜かれたため、淫靡汁が掻き乱される卑猥な音色が響き渡った。
「ああ……やっと、抜け……たあ……」
こんな状況ではあるが、双穴を狂おしい甘美で悩ましてきた挿入から解き放たれた。
なのに妙な喪失感が込み上げて、双穴が切なく窄み始める。無防備に晒された股間に乾いた風が直に当たり、淫靡な熱濁汁に火照った秘唇と菊穴を刺激した。十分に覚醒させら

れた甘美の器官はその冷たさに鎮まるどころか、ますます貪欲さを増して激しく脈打つ。
「ふあっ、なんで……？　ひあっ!!」
膣の疼きを否定するようにかぶりを振ると、ぷじゅっ、と愛液が水鉄砲のように膣口から飛び散る。
「すげえ、こんなぶっといの咥え込んでやがったんだ。しかも両方の穴にっ！」
「エロい汁でべとべとじゃないか。気持ちよすぎてたまらなかったみたいだな」
「うはー、匂いもキッツイわ。特に後ろの方」
引っ張り出した張り型の大きさに呆れながら、人々はこびりついた汁を指先ですくったり香りを確かめたりして羞恥を煽ってくる。
「まだ動き続けてるぞ、これ。こんなのいきなり抜かれちゃったら、物足りなくなっちゃうよな？」
「――ひっ!?　ち、ちが……。そ、んなもの、不要……だ……。イヤだ、から……」
肉体の欲求を言い当てられ、息を詰まらせながら否定するが、意地を張るほど膣口からこぷこぷと粘度の高い蜜汁が湧き零れる。とにかく発情猫みたいに迫り上がった尻を降ろそうとする。が、力強い腕に腰を抱き留められた。
「心配するな。俺らが満たしてやるぜ。たっぷりと」
告げると同時に、張り型では得られない独特の弾力を有した硬い太肉が、ずっぷとめり込んできた。

「おあっ、入れるな、あぁぁっ！　そ、そっち、違ッ、あ、ふぁあああぁっ!!」
当然膣の方に挿入が来ると思った。だが、極太が窄み口を割り開いてめり込んできたのは、いまや女陰と同様に潤みきって壁襞を波打たせる後穴だった。
ぬちっ、みぢみぢぃ、ずぶっ、ずぶぶんっ！
「ぬンふぅうっ、やめ、やめろッ、あぁぁっ!!　あはぁ♪」
菊門を引き締めるがなんの抵抗にもならない。むしろ擦られる感触が高まって背中が弓なりに反った。息が詰まるほどに鮮烈な刺激を淫乱な女体が快感として受け入れ、呻く声が喜びに跳ねる。
（ば、馬鹿な！　私はッ!!　こ……こんなことぉおおっ）
一瞬で我に返り、おぞましくしかし蠱惑的な刺激を否定しようとする。しかし直腸はまがい物ではない生男根に喜びはしゃぎ、激しい蠕動で歓迎を表していた。
（くぅううぅぁ、また、挿入られて、しまったっ。しかも、コレッ、こんなっ！）
猛り狂った肉の生々しさが、作り物などとは遥かに違う。
鉄のように硬いくせに、力強い弾力を備えた肉幹が、繊細な穴襞の隙間にまでまんべんなく密着して感触の鮮明度を数倍にまで跳ね上げた。
（こんな……もの、にぃッ、私の、膣内ぁあっ！）
荒々しく灼熱した牡の体温が愛液に潤んだ牝洞を沸騰させ、挿入られただけだというのにもう意識がどうにかなりそうだ。堪えるアルベルトの女体が激しい痙攣に見舞われた。

「おお、すげえっ‼　簡単に入っちまうぜ、魔女のケツ穴。ずいぶんとちんこ挿入られ慣れてるな！」
「嬉しいみたいだぜ。腰、カクカクさせてやがる」
自分の本当の身体ではないのだが、淫らな反応をからかわれる度、恥ずかしさに苛まれる。
「しかもヌルヌルのゆるゆるなくせに、根本まで埋め込んだ途端、キツく締め付けて……、きやがっ、たッ！　ぬぅうんっ‼」
「ひゃわぁあっ！　お、あぁ、なに、をっ⁉」
腸奥をズンと圧迫された衝撃に、襞壁が喜んで収縮を始めたのだから仕方がない。
締め付けのお返しとばかりに男の屈強な腕がアルベルトの女身を、アナル挿入をしたままで軽々と抱え上げた。
同時に抉り込むようなストロークが繰り出され、腸奥を重々しく突き上げられる。
（ふぅうわあっ⁉　そん……なぁあっ！）
張り型の機械的な動きと違った不規則なリズムで、予想のつかない角度から直腸の色々な箇所を抉りまくられた。
にゅりゅっ、じゅちっ、ズプッ、ぶにゅるんっ！
容赦ない激しさでありながら、肉怒張ならではの生々しい弾力に優しい愛撫の感触をもたらされる。

「んぉほぁっ!!　ふぇあ、動きゅ、なあぁっ！　おぉっ、ほぇあっ、んんんッ!!」
挿入されている間、排泄欲が狂おしいほどに高まり続けている。カリ高の肉エラに襞を捲られると、その異物感がますます存在を増して理性を追い詰めた。
切迫の甘美に、他の敏感部までもが充血を高める。乳首が痛い。陰核が疼いて切ない。
男の身体ならばあり得ない現象に狼狽え、打ち震えながら綻んでゆく淫らな股間へと、軽蔑の笑いを浮かべる民衆たちの視線が集中した。
「う、ああっ！　み、見てる、みんな……。み、見るなっ!!　見ないで、くれっ！」
後ろ穴を掻き乱される悦感に液汁を止めどなく流す女陰が丸見えだ。
「うわすげえ、愛液たらしながらぱくぱく開閉してやがるぜ、この穴ぁ。欲しくてたまらないみたい」
小陰唇ごと膣穴がくっぱりと開く度、濡れまくりな過敏粘膜に外気が触れ、刺激的な冷たさに溜め息が零れるほど心地よい。そんな部分をつぶさに観察してくる視線が物理的な刺激となって襲いくる。
（ひうっ、そんな、ことにっ!?　ああっ、やめろ、それ以上、見せるなっ!!）
両脚を他の男に持ち上げられ、子供におしっこさせるポーズを取らされた。肉花弁が開いてよく見えるようになった膣口の様子を声にして告げられる。
「近くで見るとますますでかい乳だな」
「見る、なっ！　違う、これ、私の、身体では、ないッ、ふぇえぇ〜〜〜〜ぁあっ！」

無造作に巨房を握られて喘ぎが切羽詰まる。
「おお、柔らけえ。人殺しの魔女のくせに男喜ばす柔らかくて立派なおっぱいつけてやがる。生意気な」
邪悪な魔女をいたぶるように乱暴に揉み捏ねてくる。痛い。けれども優しい愛撫だけでは味わえない切なげな疼きが拉げる巨房の奥から湧き上がった。
張り型を抜かれたことで、膣内には切ない喪失感が渦を巻き、生の極太に満たされた後ろ穴を羨ましがって激しい疼きを覚えている。
「それにしても、呆れるくらい汁が出っぱなしだな。こんなに零すなんてもったいない」
その陰部へと民衆の一人が膝をついて唇を押し当ててきた。
「ひうっ、なにをっ!?　やめ、ふぇえぇぁあっ！」
熱い肉花弁と口唇がぬちゅ、と密着する。その感触だけでも息が詰まる甘美が弾けたというのに、舌が陰唇片を分け広げて粘膜淫裂を穿り返す。親指で大陰唇を軽く開きながら、無防備になった小陰唇を窄めた舌の先で擽るように掻き乱す。
（ひぁ、あ、あああぁ、う……痒……ぃ、ひぃ）
落ち着かぬむず痒さを高められたところで、膣口から陰核の手前まで、唾液をふんだんに纏わせた舌全体を使って粘膜溝をぬりぬりと舐め回される。
「お……あ、あぁあぁ……ッ。うんんぅっ！」
陰核を直に刺激されないことが、もどかしさをたまらなくする。

膣口を浅く抉りながら、溝を強く穿った直後は、打って変わっての掠る程度の舐め方で陰唇花弁をひらひらと弄び、そして唐突にまた強い刺激で掻き混ぜてくる。
「ふんんっ！　おあっ、あ、は、うっ!!」
気持ちよいと認めずに意地を張り続けるのが困難だった。
それでも気丈に歯を食いしばっていると、男は止めどなく滲み続けるヌメリ液を、ことさら音が響く乱暴さで思いきり啜り込んできた。
じゅるるっ、ずじゅっ！　ずるじゅるじゅるずじゅじゅずじゅじゅるる～～～～ッ!!
「ひぃいっ！　吸うなっ!!　吸うな、そんな、とこッ、ふぁ、ああはぁああぁッ！」
膣内を真空にされるような勢いに、意識が飛びかけた。
牝汁を一滴も残すものかと割れ目の粘膜をしゃぶりまくる舌の快楽に腰がうねりまくって、直腸を犯す怒張の感触をますます苛烈に味わう。
舌先がクリトリスを掠めると、気持ちよくてすすり泣きそうになった。
無理矢理開帳されていた足で、思わず男の頭部に絡みつきもうずっと舐め続けているように引き寄せようとしてしまう。だがその寸前、男の顔はあっさりと女陰を離脱した。
「ふあっ!?」
残念そうな顔になるアルベルトを小馬鹿にしたように笑い、蜜液でべっとりになった口元を拭う。
「どろどろ喉に絡みついてきやがる、こいつの愛液。俺はもっとさらっと飲みやすい方が

好みだな」
「勝手なことを、言うなッ！　好きでこんなものを……っ。く、うぅっ」
あまりな言いぐさに怒りを覚えるが、自分の身体からいやらしい女の液汁が溢れたことを、なおさらに意識して動揺する。膣穴の疼きが狂おしい。
（うう、舐められた、から……。尻に挿入られてる、からっ！　う、あぁ、膣内ぁ……）
欲望に負けたくない。
こんな身体にされようとも自分は、王国の騎士なのだから。けれども、
「挿入るにはよさそうな愛液だな。試してみるぜ」
牝汁の味わいに不満を述べた男が、正面からアルベルトのヴァギナへと怒張を押し込んできた。
「ああっ、あ、あああっ！　い、挿入る……なあああっ‼　んくぅううっ！」
無駄と分かっていながら膣口を必死に窄めた。
だが硬い切っ先が触れた途端、本能があっという間に肉穴をふわりと弛ませる。
ぬぶんっ！　ずっぷ、ずぼ、ぬぷぷぷずぶっ‼
「んぁはあっ、イィ……ん、く、あぁぁっ、違……、はぁっ、ふあ、あああぁっ！」
熱を帯びた硬肉がヌルヌルの潤滑に導かれめり込んだ途端、喜悦に胸が弾んだ。感極まった襞がキュゥウと窄まって肉幹を締め付け歓待する。
（なぜ、こんな簡単に……挿入るのだっ！　太い、モノがッ‼　小さな、穴、にぃッ！）

怒張が来ただけで、さあどうぞとばかりに股穴を広げる身体が悔しくてならない。
けれども、浮き立つような擦れ具合がたまらない。
本当は男なのにとか、魔女として憎まれながら犯されているとか、重要なことすら脳裏から霞むほどに強烈な甘美に翻弄される。
「入れてる最中なのに、吸い付いてくるっ、こいつの膣穴ッ。く……ッ、はあっ、たまんねえっ!!」
絡みつくヴァギナの心地よさに興奮を昂らせ、奥まで届ききらないうちにストロークが始まる。
「んぅ、おおっ、動ッ、動くなぁ、あぁぁっ！　ふぁあ、中でッ、んお、すご……イッ!!」
作り物の男根とも、尻穴を犯す怒張とも感触の違う、節くれ立ちの激しい竿肌に膣壁が研磨された。
直腸よりも柔軟性に優れ性器として完璧に仕上がった襞管の中で、突き込んでくる度にそのゴツゴツした極太が浮かれはしゃぐように大きくのたうつ。
「ひぃいっ！　ひうっ、ひっ、はぁあぁぁっ!!」
感度の高すぎる穴を波打たせられ、息ができない。
その苦しさまでもが、奥壺が窄まるほどの甘美を沸き立たせる。理性では堪えなくてはと思うのだが、悦楽を得る器官として熟成した濡れ穴からの刺激は強烈すぎた。

「こんなおっぱい大きいのに、鎧着けてたら窮屈じゃないですか？　いま楽にしますね」
「――んふうっ⁉　ふぁめぇっ！」
男根に嬲られよろめく度、大きく揺れ弾む乳房を辛うじて押さえ込んでいた胸鎧が留め具を緩められた。余裕が生じた胸当てと乳房の隙間に男たちの手が潜り込み乳首を指先で転がしながら揉み弄る。
「ふおっ、へぁあッ‼　んうふぅっ！　はうっ‼」
一人の手にはあまる巨房が入れ替わり立ち替わりで幾人もの手に捏ね回される甘美に、弟の男根を咥えた舌の蠢きが勢い付く。
（身体中、ちんこ……されてるのに、ふあ、胸ッ、はぁああぅう、揉まれると、なんで、こんな溶けそう……なる……うぅ……ッ‼　んぁはあっ！）
下腹の熱が増し、へたり込んだ腰が尿意を堪えるようにもじもじと落ち着きを失ってくねる。
「ああ、すいません。こちらも気持ちよくして欲しいんですね？」
その様子をめざとく見つけた部下が後ろに回り込むと、腰鎧から殆ど露出している豊満な桃尻を鷲掴みに持ち上げた。
「ひうっ⁉　ひはううっ！　はひっ、放ふぇっ‼」
口に怒張を咥えたまま無理に膝立ちにさせられ、よろける。
掴まるものを求めてわたわたと宙を掻く両手へ、タイミングよく怒張が差し出された。

「くおっ！」
「んはっ‼」
「ひうっ⁉」
反射的にしっかりと掴んでしまい、ビクンと歓喜に打ち震える男の呻きと、硬く弾力的でヌメヌメな太い手応えに驚愕する。
（あぁっ、こんなものを、自分から握ってッ）
心は男のままなはずなのに、躊躇わず男根愛撫をしてしまう自分に自虐の興奮が沸き立つ。快感に虚脱してゆく身体を握ったペニスに預け、しかも支えてくれるお礼とばかりに指先で亀頭の裏を捏ねながら丁寧に幹を扱き出す。
「おおぉ、シコってくれるんですかっ、百人長‼」
彼らの興奮が高まるほど、剛直の太さが増して細指への密着を高めた。
（う、嬉しがってる！　私に、握られてッ）
硬い芯の上にコーティングされたような柔らかな肉部分がカウパーにヌメリながら弾力を増し、握り心地をよくさせる。扱く手も熱心になると、今度は節くれを波打たせて大きく脈打ちを始めた。膣内に挿入ているときこんな動きをされたらと想像すると、自然と愛液の量が増し、股ぐらがジリジリ熱を増す。
「はあ〜、裏筋まで……ッ、気持ちイイッ！」
無邪気に喜びの声を上げられると、キュンと下腹の奥が熱く疼いた。

強引ではあるが彼らに、あの舞踏会での連中のようなどす黒い悪意はない。ただ若さ故に抑えきれぬ性衝動を、扇情的な女体を晒す上官へとがむしゃらに向けてくるだけだ。

それだけに肉体が快楽へと染められてゆくにつれ、部下たちへの愛おしさが子宮の中に芽生えてきてしまう。両手でペニスを扱きながら、弟の亀頭をちゅぱちゅぱと吸い上げ、肌へ押しつけられる幾本もの男根を身をくねらせて擦る。

「下の鎧の方、キツそうですね……。お尻こんなはみ出してるのに、股が食い込んじゃってる……」

大変なことになっている下半身の装備に、目を釘付けにして部下が呟く。

「な、なら……お前が、その……脱がせてくれないか……？」

命令ではない。あえて上目遣いに見詰めながらお願いしてみると、その年若き新米騎士が生唾を飲み込んだ。まだ躊躇う目の前へと尻をクイっと迫り出した。

「――!!　ぬ、脱がせますッ！　百人長の、こ、腰鎧っ!!」

いったん火がつくと後は早い。彼は無我夢中で扇情的な防具を掴むと一気に引き下ろした。尻の谷間から深く食い込んで、股間部にみっちりと貼り付き際どい箇所を保護していた股当てが、ねちょーっと生乾きの糊付けを剥がすように粘った糸を幾本も引く。

「ふぉお、はふぁああ～～～～ンンッ」

密閉された蒸れ蒸れの肌に外気が触れる心地よい冷たさが、悩ましい歓喜の喘ぎを絞り出した。

「ああっ、まんこ……。アルベルト百人長の、おまんこ。本当に完全に女だ……。魔女の身体だっ!!」

膝下まで下穿きが脱がされ、すっかりと露わにされた股間に部下たちの眼差しが一斉に注がれる。まるで女性の性器を初めて見る好奇心旺盛な子供のような眼差しに、ゾクゾクと背筋が打ち震えた。

(見ているッ。部下たちがっ、皆が、私のはしたない女の部分をッ!)

視線を意識すると、ムッチリ実った尻の谷間で綻んだ蕾が薄い鳶色の菊襞をヒクヒクと震わせる。その真下で淫乱な発情に赤紫色へと充血した肉花弁がぐちょぐちょに爛れてほつれ開き、忙しなく開閉を繰り返す穴口から、ぼとっ、べっとべと、と煮詰めて濃くなったような愛液を吐き零していた。

「うっわ、匂い凄いなッ!!」

「嗅いでるとこっちまで変な気持ちに……。くっ、勃ちすぎて、ちんぽ、痛えッ!」

股当てが脱がされた途端に、蒸れた股間から熟成されすぎたチーズのような牝臭が溢れかえって、蜜に誘われる虫のように男たちが群がる。

(嗅いでる……っ、こんなところの匂いィッ!　こんな夢中になって……、か、可愛いかも……)

尻房へ鼻面を突き込むようにしてクンクンとその堕落の香気を吸い込みながら、くっぱり割れ開いた陰裂の襞を男たちが食い入るように覗いてくる。

子宮の疼きが活発さを増し、男のときにはなかった特別な感情が湧き上がった。まとわりついてくる部下たちが皆、愛おしくて仕方がない。

ぶべっ、ぶじゅじゅばっ!!　ブビィイイッ！

急激に窄まる膣壁が、その子宮から噴き出た濃淫汁を圧縮して水鉄砲のように勢いよくぶちまけた。

「おわぁっ!!」

「はぁあああっ！」

顔面にその熱く濃厚な飛沫を浴びせられて、騎士たちが驚愕と感嘆にどよめく。

「ふあぁぁっ、百人長の、お、おまんこ汁ぅ!!」

「はぁあうぅ～、この牝臭さ、たまらない。ふぁあむっ、んむ、じゅる、ずるじゅるじゅるるっ！」

顔にへばり付いた雫が振りまく淫靡な香気に、彼らは無我夢中でその甘露を啜り込んだ。

「ぐぅうあ、もうダメだぁあっ、このままじゃちんこ、弾けるッ！　百人長っ、い、いいですよね？　もう、ここっ、こんなぐちょぐちょなっててて、前戯とかいらないみたいだからっ、挿入(いれ)ちゃいますっ!!」

過剰な勃起に陰茎の疼痛を訴えていた部下が、もう限界のようだった。

「んぶふっ!!　ふぁあっ、ひょ、ひょれっ、挿入りゅっ、わらひの、膣内ぁふぁあぁッ」

幾本もの男根を身体中に押しつけられ身動き取れない。口には弟のペニスが深々と埋ま

って再び腰を繰り出し始めていた。振り返ることができない。
叫び声もくぐもって、勃起肉が唾液を攪拌する音にぐちゅぐちゅと乱される。
両手に握った剛直幹を八つ当たりにギュッと握るが、悦びの喘ぎが返された。
そもそも快楽に弛緩した身体を彼らに支えられている、まさに為す術もない状態で、ガチガチに硬く勃起した極太の陰茎が、性急に膣穴へと突入してきた。
ぬぶっ!!
「くぅうう〜〜ひぃいいぃッ！」
亀頭の先がはまり込む感触に膣口が感極まって窄まるが、猛る押し込みに呆気なく押し広げられた。
女陰に男の逸物が入ってくる。
何度味わっても慣れない、しかし奈落へと落ちゆくような魔の快感に尻が迫り上がると、歓喜に蠢き続ける膣襞を押し分けて剛直が一気に深くへと埋まり込んできた。
ずぶずぶっ、ぬずずずぶずぶッ！
「あぁはひぃい、膣内ッ、ん、あ、はあぁっ！　んおおぉううっ、ふあっ!!」
硬く節くれ立った感触を早く味わおうと、膣壁が勢いよく締め付けた。濃厚な熟成液が絞り出され失禁のように垂れ落ちる。その潤滑に任せて勢いを弱めぬまま狭穴を押し広げて突き進むと、怒張は奥で疼きを激しくする子宮を重々しく弾き上げた。
「挿入てるだけなのにッ。百人長の膣ぅ、なんか蠢いてるッ。ちんこ絡みついて締め付け

てきてるっ」
「んふぁあっ!!　い、いひなりぃッ！　ひうっ、ふぁっ!!　ん、おおっ、奥ぅううッ、ふぇああッ！」
どこまでも淫乱にできている。極太でヴァギナを満たされるのが嬉しくてたまらない。
ずぶずぶずぶ、ずむんっ!!　ずんっ！　ずっぷずっぷズブズブズブ!!　ずっぱんずぱん！
無我夢中の突き込みを受け止めるように自分からも腰をグラインドさせ、膣内で擦れ合う極太との感触に変化を加えた。
ぬちゅ。くちゅくちゅ、にゅりゅ、くちょ、ぬちゃぁあぁ……。
「ど、どんどん……音……はしたなくなるッ。ああ、私の股が、はしたない音、させているっ！　なのに、こ、腰、止まらない!!　擦れ合うの、気持ちいいっ！」
理性と欲望がせめぎ合い、恥ずかしくてたまらないのに淫らな振る舞いがやめられない。
「ひあああっ、んぉおおぉ、擦れッ、太ひのっ、膣内ッ、擦えふぇ……ッッ、んあぁ、奥ぅ、当ひゃうッ、コンコン当ひゃっひぇりゅぅうっ。ひぁ、硬ひゅぎぃっ！　太いいいいいいいいッ、んっはあッ!!」
穴襞の歓待に感極まって、男がバックからの激しいストロークを繰り出し始めると、全身にまとわりつく男根に自分から肌をなすり付け、両手の男根への手扱きに捻りを加えながらほっぺたを窪ませて頬張った弟ペニスをじゅぶぶぶっ、と吸い上げる。

（んはぁああっ、身体ぁ、止まらないッ。穴ぁ、挿入られると、ダメぇなるううっ‼　ふンぅう、男のものなど、はぁあんッ、汚らわしい、のに、く、ああ、気持ちイイッ！　ちんぽが愛おしいィイッ‼）

ぬぶ、ぬぷぬぷぬぷ、ぬちゅ、ぐちゅ！

「く、ああぁ、百人長、いきなり激しくなったあっ、まんこにぶち込まれてから、ますます、あああっ‼」

「どんな女より、淫らだぁ、アルベルト百人長ッ。男だからっ、ちんこの気持ちよさ知ってるしッ！」

禁欲を常としていたため自慰の経験すらない。むしろ、幾多の身体を乗り換えてきたであろう実の性別すら分からぬナスタロヴィカが、この肉体に男女両方の快楽を最大に引き出す術を植え付けたに違いない。しかしそんなことはどうでもよい。

「くぅううぁああ、兄上ぇえ、僕、もう、だ、だめ……ですっ、そんな吸う、から、もう、射精（でる）ッ」

尻が跳ね上がるほど激しく子宮を突き上げられる甘美に任せて、エリクの怒張を吸い上げていた。

根本まで深々と咥え下品な音を響かせながら幹全体を震わせるように吸ったかと思うと、亀頭の溝を唇で締め付け、裏筋を舌先で擦りながら、チュウチュウと鈴口を吸引する。

その大胆と繊細の波状攻撃に、弟はもうガクガクと腰を震わせていた。見る見るうちに

口腔で極太が急激に膨れあがってくる。
（んぅむっ⁉　ふあっ、えりきゅ、ひゃめ！）
迫り来る予兆にアルベルトは怯えた眼差しを浮かべる。なのに、唇が脈打つ熱勃起を気に入って放そうとしない。滲むカウパーをべろんと舌が亀頭から舐め拭った。
「くぅうおお、俺も、だっ、ああ、この牝穴ッ、最高すぎるからあぁっ‼」
更にはバックからヴァギナを貪っていた騎士の剛直も、更に節くれ立った幹を膨張させた。
「んひぃいっ⁉　ふあっ、らめら、らめぁああっ」
その感触を余さず味わおうと、尻をぐいっと迫り上げて膣の奥いっぱいにまで男根を咥え込む。
「くおおっ、百人……長！」
「はぁううっ、兄上ッ‼」
だめ押しの刺激が男たちを追い詰めた。アルベルトの穴に逸物を押し込んで前後で対峙する弟と部下が、ガクガクと激しく痙攣した。
「んおおっ！」
「で、射精るぅッ‼」
ぶびゅっ！　どぴゅどぴゅびゅるるるるぅッ‼
どびゅるっ‼　べびゅっ、どっびゅ〜〜〜〜っ！

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

あなたのキモチイイをお手伝い!
キルタイムのアダルトコミック誌!
業界唯一! エロラノベ&エロコミック満載!!
二次元ドリームマガジン
偶数月
17日発売
魔法、催眠、性転換…不思議Hコミック誌!
コミックアンリアル
奇数月
12日発売
フェチをテーマにツキ抜ける作品群!!
コミックプリズム
2・6・10月
下旬発売
KTCといえば闘うヒロインアンソロ!
メガミクライシス
淫らに堕ちまくるヒロインがアンソロジー!
奇数月
中旬発売
詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて!
キルタイム
検索
Click
電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!
※いずれも18歳未満の方は購入できません。

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!